

(様式 2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（企画・引率者用）

平成 24 年 12 月 3 日

所属・職名：教育文化学部・教授

氏名：宮 本 律 子

研修期間：平成 24 年 9 月 1 日～平成 24 年 9 月 22 日 (22 日間)

研修先 1：英文 Matumaini Children's Home, SAVE THE CHILDREN CENTER
和文 東アフリカ子供救援センター、マトマイニ・チルドレンズ・ホーム
「希望の家」

住所 P.O.BOX 67395 Nairobi KENYA

研修先 2 英文 The Lolldaiga Institute

和文 ロルダイガ研究所

住所 P.O.Box 26 Nanyuki, KENYA

研修先 3 英文 Kenyatta University

和文 ケニヤッタ大学

住所 P.O BOX 43844-00100 Nairobi-KENYA.

○研修成果

第一週目は、マトマイニ・チルドレンズ・ホームという児童養護施設で研修をした。今年で設立 26 年目になるマトマイニは、3 つの運営方針を取っている。まず 1 つは、孤児やストリートチルドレン、貧困層の子どもたちの救援と保護養育。2 つ目はそうした子供たちの環境を作り出してしまいうスラムのシングルマザーたちが自立し、親として責任をもって子供を育てられるよう、彼女たちへの職業支援を行うこと。3 つ目は、ケニアで深刻化されている森林伐採やごみ問題などの環境問題の現状に対し、徹底的な環境保全に取り組むことで、子供たちないしはケニア全体へ、説得力のある環境教育を施すこと。こうした方針のもとで、子供たちと同じ生活をしながら、施設のお手伝いをした。この施設での研修の間、半日を使って JICA ケニア事務所の見学もおこなった。

第二週目は、ナイロビから 200 km ほど離れたナニユキに移動し、乾燥地帯の農村で、人々の生活を改善する活動をしているロルダイガ研究所（水谷文美氏の主宰）での研修をおこなった。いかに自律的に村落開発を行ったらよいかを現地の人々とともに考える活動であった。現

(様式2)

地の子供たちに環境保全の大切さを伝えるための絵本作りに参加したり、農家の人たちが自分たちの実践を紹介しあうイベントに参加して、日本の紹介をおこなったりした。また、近くにあるケニア山（標高約5000mのアフリカ大陸第2の秀峰）の3700m地点まで登った。

第三週目は、ケニヤッタ大学に移り、大学生たちとの交流、日本を秋田、秋田大学を紹介するイベントをおこなった。パワーポイントによる発表、着物着付け体験、簡単な折り紙や習字の体験、日本食の試食などをおこなった。200名もの参加者があった。秋田大学への留学から帰ってきたばかりの学生や、この後秋田に行く予定の学生たちが、積極的に関わってくれ、イベントは大成功のうちに終了した。

○研修全般にわたる感想

参加学生5名は、短期の観光旅行を除き、初めての長期海外滞在だった。秋田⇄インチョン（韓国）⇄ナイロビの移動は学生のみでおこなったが、トラブルもなくスムーズに旅行できて安心した。また、ケニア滞在中も、病気、盗難、事故などの大きな問題もなく、すべてが順調に実施できてよかったと思う。

今回は3週間にわたり、ナイロビ市内のみならず、乾燥地帯の地方都市周辺、ケニア山、マサイマラ自然保護区などを訪れ、また、国レベルで開発援助に携わるJICAや1日1ドル以下で生活をする人々の暮らすスラムなどを訪れることができ、多角的にアフリカの実態を知ることができた研修であったと考える。

ちょうどこの研修時期に、小中学校の教師、医師と看護師、さらに大学の講師たちのストライキが行われ、予定していた小学校の授業参観、大学の授業体験などをあきらめざるを得なかったが、支援者の方々が臨機応変にスケジュールを練り直してくださり、予定以上に充実した研修であったと思う。また、学生たちも、すべてが予定通りに進むわけではないことを身を持って知り、色々な場面で交渉をすることが大事だということを実感できたはずだ。

総括すると、このような学生の研修は、学生個人個人の事前準備も当然ながら、やはり企画をする教員がいかに現地の支援者と緊密な連絡をとって実施することが重要かということを実感した。